



Title	近代日本の絵はがきを読む : 初期絵はがきを使った 日本語学習者のための読解実習
Author(s)	乾, 由紀子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2018, 16, p. 41-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68138
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代日本の絵はがきを読む

— 初期絵はがきを使った日本語学習者のための読解実習 —

Reading Picture Postcards of Modern Japan:
Reading practice for learners of Japanese language with early picture postcards

乾 由紀子

【要旨】

本稿で報告するのは、大阪大学日本語日本文化教育センターにおける日本語科目のひとつ、「歴史・歴史学の文章」の読解実習を行う選択科目の授業内容である。この授業では、明治、大正、昭和期の絵はがきについて書かれた随筆を使い、精読を行っている。ここでは一例として、関東大震災の絵はがきについて書かれた文章を読むときの授業の進め方を紹介したい。

運動会や時代祭などの季節の行事や祭りの開始、アジアで初めての万国博覧会となった大阪万博、関東大震災や室戸台風など日本特有の風土がもたらした大災害、近代テクノロジーによる飛行機の誕生、外国との戦争。近代日本を印象づけるこうした出来事は、世界的な絵はがきの流行期と重なる。絵はがきとなったこれらのイメージは、社会に広く流布された。初期絵はがきのモチーフは、今日の私たちの視点から見て意外なものに富んでいる。さらに、使用済みのものに残された私信と合せて眺めるなら、それは歴史的真相ではないかもしれないが、無名の故人の筆を借り、失われた日本の風景や時代の気分を写し出す宝庫となる。

読解の練習とともに実際の絵はがきを手にとり、受講者は文字通り日本の近代に触れる。歴史・文化・社会・自然環境等を広くとらえ、学習者の感覚に直接働きかける絵はがきは、日本を理解するための実に魅力的な教材となりえよう。

1. はじめに

筆者は、大阪大学日本語日本文化教育センターで学ぶ留学生を対象に、2012年春学期より、上級ないし中上級レベルの日本語読解の授業を担当している。筆者がこの授業において絵はがきを導入するようになったきっかけは、イギリス留学中に会った初期絵はがきにある。渡英以前にそうしたものに触れる機会はほとんどなかったが、イギリスで古い絵はがきに接するうちに、歴史や社会を肌で感じる体験をした。とくに、裏に私信がしたためられた使用済みの絵はがきからは、100年前を生きた実際の人物の日常におけるさまざまな感慨、親しい人への思いが直接伝わってきて、想像力が掻き立てられた。一葉の絵はがきを通じ、現地のさまざまな人々と交流する機会にも恵まれた。それは、歴史的事実とあわせてイギリスをより身近に感じ、理解する道具となってくれたのである。

大阪大学で日本について学ぶ留学生にもこうした感覚をぜひ味わってほしいと、明治、大正、昭和の絵はがきについて書かれた随筆を読み、そこで取り上げられた絵はがきや関連の資料を収集して紹介している。時代背景をつかむためにビデオやテレビ番組の録画等の教材も利用する。絵はがきのモチーフと自国との関係、比較、ほか様々な話題をめぐって、ときには活気あるディスカッションにもなる。

以下、絵はがきの歴史や収集、研究について簡単に紹介し、新しい日本語能力評価基準の導入に伴う授業内容の刷新が行われた2015年秋学期から2017年春～夏学期にかけての授業運営、これについての考察を述べたい。なお、考察は、2016年度春学期から2017年度春～夏学期の学

期末に学生が回答したアンケートと筆者の主観に基づくものである。

2. 初期絵はがきの歴史・収集・研究

絵はがきというメディアの歴史は、19世紀後半にさかのぼる¹⁾。その誕生には、主として郵便制度、印刷技術、写真文化の三つの近代所産が必要であった。また、絵はがきを運ぶ鉄道の発達や、有給休暇制度の成立による旅行文化の国民的普及、収集趣味の広がり（絵はがきに限らず、切手、コイン、マッチ箱等を対象とした）も初期絵はがきの流行を支えた背景と言えるだろう。

1869年、オーストリア＝ハンガリー帝国で、郵便の効率化を目的とした「はがき」という定型の小さな紙片による通信制度が成立した。高水準の印刷技術を誇っていたドイツ、オーストリア、スイスは1870年代に私製はがきの使用が認められると絵はがき先進国となり、1880年代には美しい風景絵はがきを作ることになった。イギリスでは1890年代末にボーア戦争をきっかけとして流行が始まり、フランスでは1900年のパリ万博による爆発的なブームが起きた。ヨーロッパ諸国に続き、北米やオーストラリアでも絵はがきは広がりを見せた。一般に、その世界的な流行期は、19世紀末から第一次世界大戦期とされる。1910年代前半のイギリスでは年に7億から8億の絵はがきの投函数があったと言われ、例えば1911年には、国民ひとりあたり、年間約17枚の絵はがきを投函した計算になる。

日本もこうした流行に遅れをとっていない。1871年の郵便制度成立の2年後、1873（明治6）年に絵がついていないはがきが導入され、その4年後に万国郵便連合加盟を果たした後、1900（明治33）年には私製のはがきが認可されている。これにより、絵はがきは業者によって売り出され、雑誌に美しい付録として挿し込まれるようになった。魅力的なイメージ、そこに一筆を加えて送るだけの簡単で安価なコミュニケーションツールとしての絵はがきは、明治末期、大幅に増加する年賀状の投函数とあわせて量的なピークを迎えた²⁾。

日本の絵はがきブームを決定づけたのは、1904（明治37）年に起きた日露戦争である。戦地にいる出征兵士にはたくさんの絵はがきが支給され、郵便料金が免除されて本土に送られた。本土からもさかんに送られた。戦果の好況、凱旋の式典や行進等を写した大量の記念絵はがきは官製、私製とも人々を魅了した。郵便局に殺到した群衆の制圧に騎馬巡査も出動、怪我人や死者を出すまでの騒動に発展している。逓信省は「第一回戦没記念郵便絵葉書」（5枚一組）を最初26万5000組発行、三日後には15万組追加発行した。

こうした初期絵はがきの流行は、インターネットはもとより、テレビ、ファックス、新聞、雑誌等の、豊かな視覚情報網、報道網に囲まれて生活する現代の私たちにとって想像するのはやや難しい。しかし、当時、見ための美しさとずば抜けた速報性、値段の安さ、取扱いの容易さを誇る絵はがきの流行が、ひとつの目立った社会現象であったことは間違いない。

一種の骨董品としての初期絵はがきの歴史研究は、欧米の収集家やディーラーを中心として開始された。学術領域における絵はがきの研究は北米を中心とし、1980年代頃より、歴史学はもとより、美術史、写真史、社会学、人類学、民族学等、さまざまな領域において試みられてきた。ノスタルジアへの耽溺と遊び心が一般の人々の日常にあふれるイギリスの場合、本格的な概説書は1950年代末より出版された。この前後に初期絵はがきの収集ブームが起きた。地域ごとに絵はがきクラブが結成され、専門の雑誌も出版されるなど、1960年代には全国的、国際

的なレベルでの初期絵はがきをめぐる流通環境がととのった。現在でも地域の教会や集会所で1、2ヶ月に1度の割合で絵はがき市が開かれている。

日本でも2000年前後から初期の絵はがきに注目が集まり、収集家や研究者の間での交流が活発になっている。日本には絵はがきの専門店がほとんどないが、古書店、骨董店、切手店やそれらの集まる市で絵はがきとの出会いがある。インターネットのオークション等でも多数の出品が見られる。

3. 授業概要

3.1. 受講生

受講生は「日本語・日本文化研修留学生プログラム」と「短期留学日本語・日本文化特別プログラム」の学生である。2012年よりこれまで、この授業で想定されている学生の日本語レベルは学期によって変動してきた。現在は、2015年秋学期より導入されたCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に対応した日本語能力評価基準による「中上級レベル」（B2）ないし「上級レベル」（C1）である。

さかのぼって見ると、毎学期受講者1名から6名までの少人数の授業ではあるが、受講者の出身地域はアジア、ヨーロッパの多岐にわたっている³⁾。2015年秋学期から2017年春～夏学期までに修了した受講生の構成は以下のとおりである。

2015年度秋（中上級）中国1名、ポーランド1名、ロシア1名、イギリス1名、香港1名

2016年度春（上級）中国1名、台湾1名、ベトナム1名

2016年度秋（中上級）タイ1名、中国1名、台湾2名、ブラジル1名

2017年度春～夏（中上級）台湾1名、スイス1名、ベルギー1名

3.2. 教材

3.2.1. 随筆のコピー

読解で使用するのは、初期絵はがきについて書かれた橋爪紳也による随筆集『絵はがき100年近代日本のビジュアル・メディア』（朝日新聞社、2006年）からの抜粋のコピーである。

建築史・都市文化論の研究者、橋爪は、絵はがきの収集家である。本随筆集は、2003年10月から2005年8月まで、朝日新聞夕刊（大阪本社版）に連載した記事「橋爪紳也の絵はがき漫遊」に加筆して出版された。橋爪は、絵はがき収集を始めた経緯について、戦前の建築史を研究する上で「ディスプレイや街頭装飾に関する過去の事例を復元する手段として有効だと考えたのがきっかけ」であり、絵はがきは「設計図が遺されていない市井の店舗建築の様子を伝える史料としても重要だと考え」、「また副次的に、建物と街の様子、そして人々の風俗がうつりかわるさまを追うと、歴史資料としても有効」と述べている⁴⁾。

本随筆集はもちろん日本語学習者向けに書かれた一冊ではない。しかし、歴史的な対象を扱う専門家による、新聞に掲載された文章であることから、ある程度日本語読解力のある外国人留学生にとって比較的平易な文章でやや専門的な内容に触れるよい機会となると考えている。日本の大学に留学して一般の授業を受講するまでの橋渡しともなるだろう。

本随筆集で橋爪はさまざまなモチーフの絵はがきを紹介している。その魅力は、関西を舞台

とするイベントを写した絵はがきが圧倒的に多いことである。この点はとくに、関西の拠点である大阪大学に学びにやって来る留学生向けのテキストとしてふさわしいと言えるだろう。

15回の授業では、「花見」や「運動会」などの伝統的な季節の行事、「祇園祭」、「天神祭」、「時代祭」に代表される祭り、「通天閣」などの観光地、「関東大震災」や「室戸台風」などの災害、「日露戦争」の記念絵はがきや「太平洋戦争」期のプロパガンダとして作られた絵はがき、外国人女性飛行家の東京や大阪での飛行会、1970年の「大阪万国博覧会」などの絵はがきについて書かれた文章を読む。このほか、絵はがきの歴史や2000年初頭から見られる初期絵はがきの収集熱、研究ブームなどに関する部分も取り上げている。

できるだけ、実際の祭りや行事などとタイミングを合わせて読むようにしている。受講後、それらに実際に参加したり、見学できれば、より一層の学びが期待でき、関心が深まるかもしれない。また、大阪大学で出会った他の留学生や日本の友人と一緒に出かけ、交友を深めながら人生の特別なひとときを味わう機会となればと考えている。

3.2.2. 補助プリント

随筆の読解を補助するために作成した「補助プリント」と呼ぶプリントが毎回の読解で活用される。このプリントの【語彙・表現】の項目には、随筆中にあるほとんどの漢字にふり仮名をふって書き出し、受講生が辞書で調べやすいようにしてある。漢字以外でも覚えておくとうい表現なども書き出して置く。

また、同プリントの【読解】という項目には、内容確認のための設問を準備する。

このほか、【ディスカッション】という項目を添える場合もあり、そこには受講者全員でディスカッションする予定のテーマを書いておき、教室に入る前に自分の意見をあらかじめまとめて発言できるようにしてもらう。

3.2.3. 絵はがき

随筆のなかで紹介されている絵はがきと全く同じ図柄、またはよく似た図柄の絵はがき、関連の絵はがきの実物を収集して準備する。絵葉書は古書市、古書店への直接注文、インターネットオークションで落札するなどして収集する。

3.2.4. オーディオ・ヴィジュアル資料（AV資料）

随筆の歴史的背景を知ってもらう上で大変役に立つのは、オーディオ・ヴィジュアル資料（以下、「AV資料」）である。市販のDVDやVHSのほか、自宅で録画したテレビ番組、インターネット動画を使用することもある。以下の授業スケジュール表に、実際に使用したAV資料のタイトルや授業における使用時間を提示する。

3.2.5. その他

絵はがきが出版された当時の地図、現代における祭りや観光地の広告、パンフレット、随筆中で言及のある新聞記事、雑誌など、講師が収集した資料をコピーして配布したり回覧することもある。

3.3. 授業スケジュール

2016年秋学期と2017年春～夏学期において実際に行った授業運営スケジュールは以下のとおりである。

3.3.1. 2016年秋学期 授業スケジュール

回	日付	随筆テーマ	随筆タイトル	AV資料
1	2016/10/04	オリエンテーション		
2	2016/10/11	時代祭	「京都・時代祭」	DVD (15分) 『四季に咲く 京都三大祭り』
3	2016/10/18	時代祭	「京都・時代祭」	
4	2016/10/25	運動会	「心身ともに鍛えた「運動会」」 「宗教儀礼とスポーツの融合」	NHK衛星放送録画 (30分) 『Japanology Plus -Sports Day』
5	2016/11/01	運動会	「宗教儀礼とスポーツの融合」	
6	2016/11/08	災害 (地震)	「災害の現場から」前書き 「関東大震災、浅草名物も崩す」	
7	2016/11/15	災害 (地震・台風)	「関東大震災、浅草名物も崩す」 「大阪を直撃した「室戸台風」」	TV番組録画 (7分) NHKスペシャル 『カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年～』
8	2016/11/22	災害 (台風)	「大阪を直撃した「室戸台風」」	VHS (30分) 『日本映像の20世紀』大阪府 (1)
9	2016/12/06	日本初の私製絵はがき等	「100年前にはメディアの役割」	
10	2016/12/13	日本初の私製絵はがき等	「100年前にはメディアの役割」	
11	2017/01/10	日露戦争と絵はがきの流行	「官製絵はがきの流行」	
12	2017/01/17	日露戦争と絵はがきの流行	「官製絵はがきの流行」	
13	2017/01/24	初期の飛行機	「女性飛行家、来日してブーム」	
14	2017/01/31	試験		
15	2017/02/07	試験結果開示・アンケート・反省		

3.3.2. 2017年春～夏学期 授業スケジュール

回	日付	随筆テーマ	随筆タイトル	AV資料
1	2017/04/11	オリエンテーション		
2	2017/04/18	花見	「沿線に造られた花見の名所」	
3	2017/04/25	花見	「花見は日本独自のスタイル」	TV番組録画 (15分) NHK教育 トラッドジャパン『桜』
4	2017/05/09	災害 (地震)	「災害の現場から」前書き 「関東大震災、浅草名物も崩す」	
5	2017/05/16	災害 (地震)	「関東大震災、浅草名物も崩す」	TV番組録画 (7分) NHKスペシャル 『カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年～』

6	2017/05/23	災害（台風）	「大阪を直撃した「室戸台風」	VHS（3分） 『日本映像の20世紀』大阪府（1）
7	2017/05/30	日本初の私製絵はがき等	「100年前にはメディアの役割」	
8	2017/06/06	初期の飛行機	「米本土空襲の歌」	インターネット動画（4分） YouTube『米本土空襲の歌』
9	2017/06/13	初期の飛行機	「女性飛行家、来日してブーム」	
10	2017/06/20	大阪万国博覧会	「冷戦象徴、月の石vs.ソユーズ」	VHS（7分） 『現代日本の歩み：映像ドキュメント』 社会編 ⑨昭和元禄
11	2017/06/27	祇園祭	「孟嘗君にちなんだ「函谷鉦」	
12	2017/07/04	祇園祭・天神祭	「孟嘗君にちなんだ「函谷鉦」 「わが町誇りの「御迎人形」	DVD（20分） 『四季に咲く京都三大祭り』
13	2017/07/11	天神祭	「わが町誇りの「御迎人形」	インターネット動画（6分） 『日本の祭り 太鼓 天神祭（大阪府大阪市）』
14	2017/07/18	試験		
15	2017/07/25	試験結果開示・アンケート・反省		

3.4. 授業の進め方の例

授業の進め方の一例として、2017年5月9日と5月16日に行った災害の絵はがきに関する授業をふりかえって紹介したい。

3.4.1. 予習

前の授業の終わりに、災害関係の絵はがきについて書かれた章「災害の現場から」の扉にある短い前書きと「関東大震災、浅草名物も崩す」の二つの随筆のコピー、これらに補助プリントを準備して受講生に配布する。授業外での学習の大切さをオリエンテーションの時から強調しているので、受講生は補助プリントを利用した音読練習、語彙の意味調べ、全体の内容把握、そして余裕があれば背景についてインターネット等で簡単な調査も自身でやってくる。

3.4.2. ウォームアップ

随筆に入る前に、様々な国の出身である受講者に災害について尋ねてみる。このとき補助プリントの【ディスカッション】にあるテーマを話題にし、自国では、気候や地形などの影響でどんな災害が起こりやすいのか、規模はどうか、どのような対策が取られているのか、日本と比較してどうかなどを話してもらう。また、例えば東日本大震災の映像についてどう思ったか、災害支援の個人的な経験、災害の多い日本での滞在についてどう思うか、等についての各自の意見をクラスで共有する。

3.4.3. AV資料の視聴

関東大震災の絵はがきに関する随筆に入る前に、震災の様子をとらえた貴重なカラーフィルム映像を『カラーでよみがえる東京～不死鳥都市の100年』（TV番組録画）のなかから約7分間、

教室で視聴する。この映像はNHKがフランスのチームと共同で制作した貴重なもので、明治から昭和期に撮影されたニュース映画やプライベートフィルムの白黒映像に、様々な分野の専門家の知識と最新のデジタル技術を駆使して当時の色彩を特定、復元したものである。

時々一時停止して解説したり、受講者からの質問を受けたりする。映像を見たあと、感想を言ってもらう。カラーだったので現実として捉えやすく、大震災の状況を見てあらためて驚いたという感想が多かった。

3.4.4. 随筆の読解

「関東大震災、浅草名物も崩す」という題の、関東大震災の惨状を撮影した写真絵はがきに關する随筆を読む。関東大震災は、1923（大正12）年9月1日午前11時58分、マグニチュード7.9の規模で発生した関東地域の大地震であり、地震後に同時多発した火災によって、東京は壊滅的な被害を受けた。

授業での読解は、段落ごとに進める。受講生のひとりが音読したあと、まず、その段落の要旨を次の学生にまとめて言ってもらい、語彙や表現に関する質問を受けつけ、講師が回答したり、他の学生にあてて確認したりする。また逆に、講師側から学生に質問することもある。一般的な日本語の語彙・表現はもとより、歴史関係の語彙はできるだけ丁寧に取り上げる。

例えば、前書きに見られる、写真やメディア分野の歴史的用語である「画帳」、「グラフ雑誌」という語であれば、その草分けといわれる『アサヒグラフ』（1923年創刊、2000年休刊）に関する簡単な歴史的解説を板書しながら加える（大正デモクラシー、戦争、高度経済成長、オイルショック、バブル崩壊などを特集した等）。また、東日本大震災のとき緊急復刊された2011年3月30日号の実物を回覧する。

随筆では、当時の東京・浅草公園のシンボル、「浅草十二階」（凌雲閣）が地震で崩れてしまったことが話題になっている。これを受けてまず、1890（明治23）年に建てられ、日本初のエレベーターが設置された赤レンガづくりの十二階完成時の細密画や、浅草公園の美しい風景のなかにそびえ立つ姿（奥の最も背の高い建築）を撮影した絵はがき（図1）を見せる。夏目漱石、江戸川乱歩、田山花袋、石川啄木、北原白秋、川端康成などの著名な文学の担い手や歌人たちをも魅了したこの塔が彼らの作品に姿を現し⁵⁾、また、たくさんの美しい絵はがきとなって社会に流通したことを伝える。



図1. 絵はがき「(東京名所) 浅草公園 The Asakusa Park Tokyo」

3.4.5. 絵はがきを手にする

随筆では、絵はがきが図版で紹介されている（図2）。塔は震災後23日目に取り壊されたが、震災直後の崩れた姿を写した絵はがきは、震災前のものと比較して現在の市場で手に入りやすく、しかも近景が撮影されている場合が圧倒的に多い。崩れた十二階の絵はがきは、今日と比べるとテレビやインターネット等の情報が無く、新聞や雑誌に印刷された写真の量も限られていた当時、関東大震災の惨状を物語るシンボルの視覚イメージの役割を果たした感が強い。とにかく首都で何が起こったか知りたいと願う人々に飛ぶように売れたという。

授業では通常、随筆中に図版で紹介されている絵はがきと全く同じ絵はがきか、よく似た図柄の絵はがき、また関連の絵はがきを受講生に回覧する。図2とまったく同じ絵はがきを探してみたが見つからなかったのが、代わりに、似た図柄で写真下部に「倒壊セル浅草十二階」というキャプションの印刷が入っている絵はがき（図3）を古書店から購入して受講者に手に取って見てもらう。

ところで、「手に取って」見てもらう理由は何か。それは触覚から作用する強い刺激を受けとってもらうためである。手に取ることによって、ある歴史的な事物が「存在するらしい」と頭で認識するのとは全く質のちがう印象が残るかもしれない。使用済みであればなおさらである。差出人の手書きの文字は特別な感情を起こさせる。教室で実際に触れることができる歴史的な事物は非常に限られている。史実を学ぶとともに、感覚から心を通して歴史への想像力や探究心をかきたてることができればと考えている。

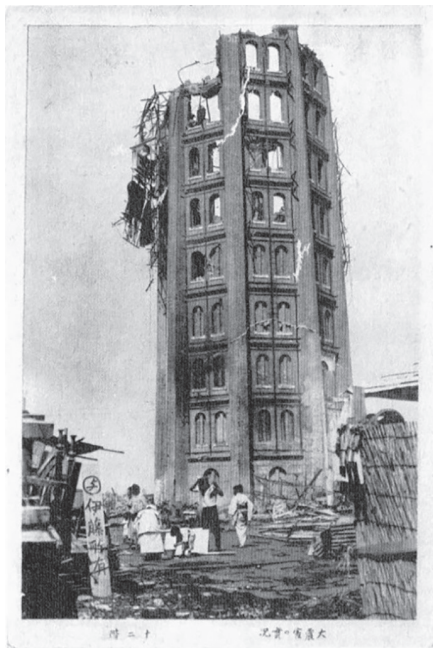


図2.「図版45「大震災の実況 十二階」14.3×9.0」

橋爪 p.109

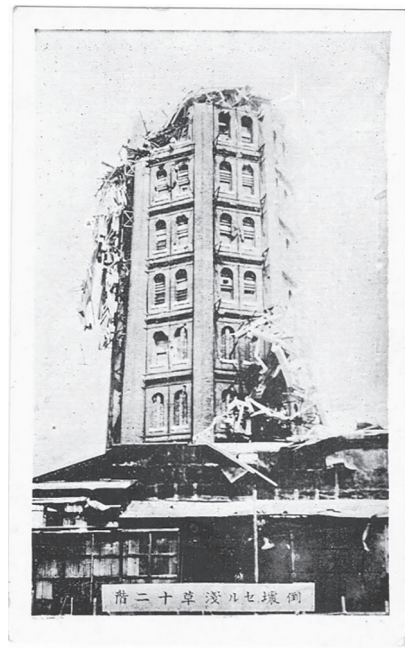


図3. 絵はがき「倒壊セル浅草十二階」

3.4.6. 歴史的背景の解説

受講者が随筆の内容理解を深められるよう、さらに歴史的背景の解説を加えることもある。関連の絵はがき、震災体験者のインタビューや手記、当時の新聞記事等の要旨を簡潔に、簡単

な日本語で紹介する。手元にある資料を書きだしてみるが、実際の授業ですべてを詳細に取り上げることはしていない。

例えば、以下は橋爪の随筆の最後のくだりである。

時間とともに、東京と横浜は未曾有^{みぞう}の大火災に見舞われることになった。東京では翌二日午前三時に下町一帯が炎にのまれ、逃げ惑う人たちで大混乱となった。陸軍本所被服廠^{ひふくしょう}跡地では火災旋風が巻き起こり、避難した人たちが犠牲となった。完全に鎮火したのは地震発生から丸二日たった三日午前10時ごろという⁶⁾。

本所区・深川区の被害はとくに著しかったと言われている。地震発生時はちょうど昼食時で火を使っていた家庭が多かったため、ガス、かまど、七輪などから、あるいは薬局、大学での薬品の落下等で、東京市内各所で同時に火災が起き、町は火の海となっていく⁷⁾。

授業ではここで、絵はがき(図4)を回覧した。随筆にある「逃げ惑う人たち」の一員であった、日本髪を結い、着物を着た女性たちが、深川の町に横たえてあった鉄管のなかに身を寄せ合って入り、避難している場面と考えられる。手前に皆が脱いだ草履がきちんと揃えて管の表に立てかけてあるのが見える。このような危機的状況下にあって、なんと礼儀正しいことかと驚いて指摘した受講者がいた。



図4. 絵はがき「深川鉄管中の避難民」

図5と図6は、本所被服廠跡地の「惨状」を写した絵はがきである。図5では、現代の私たちの感覚では容易に受け入れがたく、まさか絵はがきになるとは考えにくいようなモチーフである、犠牲者の遺体群が生々しくも写し撮られている。また、図6では、葬儀の鯨幕が張られ、花が添えられた慰霊の場所に、箱や瓶いっぱい集められた犠牲者の遺骨が整理されて並べられている。

当時の陸軍被服廠跡地には近代的な運動公園等を造る計画があり、大勢の周辺住民が家財道

具をたずさえ、この広い空き地に避難した。多勢の避難民が大八車に家財道具を載せ、あるいは大きな荷物を肩に背負い、避難できる場所へと向かったという。しかし、多くの人たちはどこへ逃げれば安全なのかわからず、ただ右往左往した。避難についての情報がないため、誰かが「あっちへ逃げろ」と叫ぶと、みな一緒になってやみくもに駆け出す。そして新たな火にぶつかった⁸⁾。

生き残った人（男性、当時22歳の会社員）の手記からの引用である。

火災は二之橋、吉田町報恩橋通り、浅草蔵前方面の三ヶ所だったが、このままでは危険であるので避難することにし何も持たずに家を出た。亀戸、蔵前、本郷方面は火災のため通行出来ない。思案していると誰かが言うことなしに被服廠へ行けと声がし、私を含めた会社の人15名がそこへ入った。この広場は相当な広さで、私達はその中央寄りに集まった。広場の南方向に当時、安田保善商業が建築中で、その建物および足場に津波を恐れた群衆が登り避難していた。広場は、荷車等に家財を満載し運び込む避難者で身動き出来ない状態になった。

突然、物凄い竜巻と突風が吹き荒れ始め、家財や人体が中天高く吹き上げられ、人々の泣き叫ぶ声、助けを求める人、経文を唱える人などで大混乱となった。私は傍にあった布団を頭に被り地に伏した瞬間、煙が一面に立ち上がり見る見るうちに、荷物に火が付き、一面火の海と化した。私も立ち上がり、方向も分からず人と共にかけて、物につまづいて転倒し多くの人に踏みつけられた。人々は行手に安田邸の塀があり、その上には硝子片が植付けられており、乗越えられず全員が焼死した。⁹⁾

安全な避難場所と思われた陸軍被服廠跡地はたくさんの人と荷物で埋め尽くされた。「巡查が被服廠へ逃げろと誘導していた」という手記も残っている¹⁰⁾。しかし、そののち、四方から猛火が迫った。布団などに火の粉が燃え移り、ついに火災旋風が空高く巻き起こった。逃げ惑う人々に火が襲いかかる。辺りには17メートルほどの強風が吹いていたと伝えられる。この日、能登半島付近にあった台風の影響で、関東地方には南東からの強い風が吹いており火災が広がりやすい条件があった。3万8千人もの人々が被服廠跡地で命を落とした。関東大震災の死者・行方不明者のうち、その三分の一にあたる犠牲者がここから出された¹¹⁾。

震災後、被服廠跡地は整備され、「横網町公園」と名付けられ、犠牲者追悼のための慰霊堂と復興記念館が設けられた。現在は、東京大空襲の身元不明の犠牲者も合祀されており、毎年、法要が営まれている。

震災直後の横浜駅前の様子を写した使用済みの絵はがき（図7（表）・図8（裏））は必ず授業で紹介する一葉である。瓦礫の海のような前景の向こうに、屋根が焼け落ちたレンガ造りの駅舎がぼんやりと見える。

裏を返すと、宛先は「滋賀縣阪田郡米原」とあり、差出人の住所は「大阪府東成郡古市村大字」となっている。消印の数字は「12.10.17」とあり、大正12年10月17日、つまり、震災後一か月半ほど経て投函された絵はがきであることがわかる。



図5. 絵はがき「大正十二年九月一日 東京大震災実況 被服廠跡の惨状」



図6. 絵はがき「本所被服廠跡遭難者各方面の遺骨」



図7. 絵はがき「横浜駅前ノ大火災の実況」(裏に私信あり)

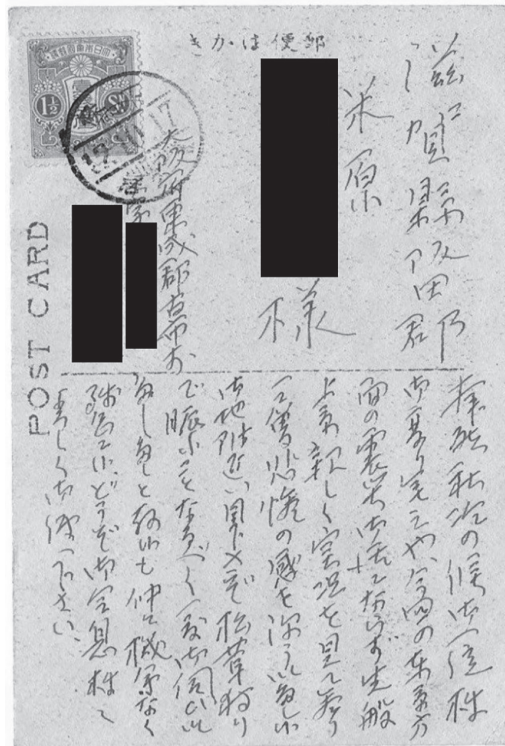


図8. 絵はがき「横浜駅前ノ大火災の実況」(図7)の裏面

私信には震災に関する記述があり、以下の引用文ではこれを下線で示す。受講者には、筆者が判読した文をあわせて回覧して見せながら、内容を現代日本語になおして聞かせる。伝統的な手紙の形式についても少し解説する。

拝啓 秋冷の候 御一統様 御変り無シや、今回の東京方面の震災御話二ならず 先般上京 親しく実況を見て参り 一層悲惨の感を深う以度し候
御地附近ハ目下さぞ松茸狩りで賑ふことなるべく一度御伺ひ以度し度しと願ふも仲々機会なく残念二候。どうぞ御令息様二よろしく御伝へ下さい。

(下線は筆者による)

差出人は、大阪からはるばる「東京方面」へ出向いたのであろうか、被災の様子を目の当たりにして「一層悲惨の感」を深くしたとある。

関東大震災という歴史のなかの出来事が、突然、臨場感をもって感じられる文面である。このような文面を前にするとき、受講者はみな一瞬、驚いた顔を見せる。今、自分が触れているこの絵はがきに、大震災の惨状を目にした人物も触れていたのだという思いがそうさせるのだろう。

3.4.7. 再び随筆全体を見わたして語彙の確認

随筆を精読し終わったら、補助プリントに設けた【読解】の問に入り、受講生に順に解答してもらおう。以下、「災害の現場から」と「関東大震災、浅草名物も崩す」の二つの随筆にある

【読解】の問とその解答例を示す。

「災害の現場から」

問① 絵はがきは、今日でいえばどのような役割を果たしていたのですか。

解答例 悲惨な災害が起きたとき、新聞社の出版するグラフ雑誌よりも速報性が高かったと考えられる絵はがきは、現代のテレビのニュース速報やインターネットからの情報などの高度な情報環境がないなか、人々が頼らずにはいられないメディアであった。

問② セットになった災害の絵はがきのなかにはどんなものがあつたと書かれていますか。

解答例 災害直後の現場、避難した人々の窮状、支援物資の配給、政治家や皇族の慰問など。罹災、避難生活、復興のはじまりまでを順に示し、災害の全体像がわかるようになっている。

「関東大震災、浅草名物も崩す」

問① 文章中に出てきたさまざまな種類の災害関係の語（ニュース報道などでよく使用されている語）を、「一時的自然現象」と「二次的災害現象」に分けて答えなさい。

解答例 一次的自然現象＝地震、台風。二次的災害現象＝崖崩れ、山崩れ、土石流、土砂災害、津波、火災、火災旋風（等）。

3.4.8. 復習

読解が終わったら、受講者は随筆の内容を日本語400字程度にまとめ、次の授業の時間までに提出する。すべての随筆についてではなく、おおよそテーマごとにひとつの随筆について行い、学期全体で5回ほどになる。電子メールに添付して講師に送ってもらえば、それに返信することで添削やアドバイスが容易である。手書きで漢字を覚えたいという学生には、原稿用紙等での提出も認めている。

この作業により、随筆中で学習した語彙や表現だけでなく、授業中に置きかえて学んだ言葉とあわせて復習できる。日本語レベルの高い受講者であれば、できるだけ自分の言葉で表現するようすすめている。

3.5. 成績評価

成績は、授業参加度30%（うち、出席15%、発言15%）、随筆の要旨提出30%、最終試験40%の割合で評価している。試験は、授業で読んだ随筆のなかから出題する。

4. 考察

最後に、2016年春学期から2017年春～夏学期までの3回の学期末に、大学側と筆者独自で行った2種類のアンケート結果から、受講生が授業についてどのような感想をもったかを簡単に紹介したい。回答の文は日本語学習者によるため、あいまいな点もあるが、ありのまま表記する。

はじめに、難易度について「教材の難易度を5段階で言うとしたら、どれになりますか？（1を最も易しいとする）」という問に関して以下の回答を得た。

2016年度春（回答者2名） 2（1名）、3.5（1名）

2016年度秋（回答者4名） 3（1名）、4（3名）

2017年度春～夏（回答者3名） 3（2名）、4（1名）

教材についての肯定的なコメントには、「分からないところも時々あるけれど、先生の説明や地図などのプリントを見ながら、ちゃんと分かるようになってきました。絵はがきについては、素人としての学生はたぶん見てもらえきれいだと思うしかないかもしれないので、見どころやポイントを紹介していただけると助かります」（2016年春）、「面白いと思います。日本に関することを勉強するのはほとんど歴史的事件と人物ばかりですから、絵はがきの角度からの歴史や文化など、非常に面白かったです」（2016年秋）、「読解の力だけではなく、日本の文化もいろいろ勉強になりました。授業を楽しんでました」（2016年秋）、「教材の本文の紹介だけでなく、本文の内の事件の背景や関連する事件も紹介してくれることは非常にいいと思います」（2016年秋）、授業のなかでよかったところは「絵はがきの歴史について紹介するところです。昔は絵はがきはそうなんにおもしろいのが知りませんでした」（2017年春～夏）、「良かったと思います。他の授業で勉強しないことがこの授業で学べられます。文化的なことも、一般的 学校で学ばないことがこの授業で勉強になりました」（2017年春～夏）、「とてもおもしろかった。もっと授業に興味になります」（2017年春～夏）等が見られる。

一方、教材に関するコメントのなかには、「面白いと思いますが、絵はがきに興味ない学生さんには面白く思えるかは少こし疑問です」（2016年秋）に代表される意見もあった。また、教材としての随筆を「言語」的側面と「知識」的側面に分けて分析し、「綺麗な日本語表現、理解しやすい段落構成、各段落では中心文（main message）がある」と評価しながらも、「複数の小さい分野の情報・知識が学びましたが、一つのテーマについて全面的なlectureが欲しい」（2016年春）といった体系的な歴史の学習を求める声も見られる。同じ回答者は、授業全体についても「文章自体をよく理解できた」が、「知識・情報の点がばらばら、繋がっていない」としている。

随筆、回覧した絵はがきの実物・雑誌・DVD等のうち、「最も印象に残った教材はどれですか？」という問に対し、「実際の絵はがき」（2016年秋）、「絵はがきです」（2017年春～夏）等の回答は嬉しかった。

テーマごとに見て、「花見」、「祭り」、「運動会」、「災害」、「大阪万博」、「絵はがきの歴史」など、印象に残った随筆については意見がさまざまに分かれるが、「災害」との回答が目立った。とくに「災害の記録ビデオ」（2016年秋）、「関東大震災のビデオ」（2016年秋）が印象に残ったとの声や、「被害に関する教材が一番勉強になったことです。昔に日本で起こった被害についてはあまり勉強したことがなかったので興味深かったです」（2017年春～夏）などのコメントが見られた。

このほか印象に残った随筆に関して、「祇園祭に関するエッセイです。実際に見に行ったとき、事前に勉強したことがあるため、行事を見物して、理解できるようになったからです」（2016年春）、「絵葉書の流行と国民国家の形作りの関連についてのエッセイです。国を作る歴史に関心があるからです。絵葉書の歴史の流れの中の役割割り」（2016年春）といった回答が見られた。また、「エッセイの選択上には、もっと趣味性の強い題材が欲しいです。戦争や災害などの

テーマはちょっと重いと思います」という意見もあった。

随筆の要旨の添削が役にたったという声や、授業全体についての感想としての「人数少ないで良かった」（2016年春）や「毎週すこしずつ宿題があって、少しずつ、適切な量の知識をしっかり毎週学ぶというのはとてもいいと思います。でも、人数増えると、細かいところまで説明できないということもあるかもしれません」（2016年春）により、受講者が少ないことが、絵はがきの回覧や提出された要旨の添削が迅速に適切に行われる不可欠の条件であると改めて感じさせられた。

このほか、世界各国からの受講者を迎える授業をふりかえって筆者が時折難しいと感じさせられるのは、絵はがきを通じて、近代の戦争を授業でどのように扱うかという点である。すでに述べてきたように、絵はがきはコミュニケーション手段が今日ほど発達していない時代に誕生し、その速報性、視覚的情報の豊かさ、美しさ、値段の安さ、取扱いの簡単さにおいて当時は最先端のメディアであった。絵はがきの利点はそれだけではない。何か大きな社会的事件を「記念」とするという役割も大きかった。とくに戦争は初期絵はがきの飛躍的発達と密接な関係にある。橋爪の随筆でも、普仏戦争とドイツの絵はがきの先駆的流行、ボア戦争とイギリスの絵はがきの流行への言及があり、さらに日露戦争と日本の官製絵はがきの流行、太平洋戦争期のプロパガンダ絵はがきなどについては大きく紙面が割かれている。これらを授業で読むとき、戦勝国、敗戦国それぞれの国の出身者を前にして、また今日のセンシティブな国際情勢のなかで講師が戦争をどう扱うかはひとつの鍵となってくるだろう。これはとくに近現代史関連の授業運営に携わる者ならだれでも経験する側面であろうか。

100年前、ヨーロッパから世界中に広まった絵はがき。人々の心をとらえ、大流行を巻き起こしたこのメディアを通して近代を読むとは、写し出されるどの国の過去の美しい断片にも、また醜い断片にも、ひとしく回帰することである。そこには捉え方によって美と醜、善と悪、支配と被支配のさまざまな逆転が起こりうるだろう。絵はがきを紹介する側の力量が試されるのはそのときであろうか。世界中から教室に来る受講者とともに、今後も真摯に取り組んでいきたい。

注

- 1) 絵はがきの歴史全般およびイギリスの絵はがきに関して、乾pp.3-18、pp.21-36参照。
- 2) 日本の絵はがきの歴史については、生田p.116-129、橋爪p.4-19、細馬（2）pp.10-26参照。
- 3) 2012年度春学期から2015年度春学期までの修了者の出身地域は以下のとおり。2012年度春（イタリア1名）、2012年度秋（モンゴル2名）、2013年度春（台湾1名、韓国2名）、2013年度秋（インドネシア1名）、2014年度春（中国3名、韓国1名、ベルギー1名、ロシア1名）、2014年度秋（中国1名、韓国1名、ベトナム1名、フランス1名、ブルガリア1名）、2015年度春（ブラジル1名、タイ1名、ドイツ1名）。
- 4) 橋爪pp.5-6。
- 5) 例えば、様々なメディアにおける十二階をめぐる言説等を追った細馬宏通の研究にある夏目漱石『坊ちゃん』（明治39年）の抜粋を音読して解説する。「おれは空を見ながら清の事を考へて居る。金があって、清をつれて、こんな綺麗な所へ遊びに来たら囁愉快だらう。いくら景色がよくつても野だ杯と一所ちや詰らない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥づかしい心持ちはしない。野だの様なのは、馬車に乗らうが、船に乗らうが、凌雲閣へのらうが、到底寄り付けたものぢやない」細馬（1）

pp.25-26。

6) 橋爪p.111。

7) 「はじめに」(関東地震の被害)、『関東大震災・体験者インタビュー』東京大学社会情報研究所 廣井研究室。

8) 同上。

9) 平山昌次さんの手記。『関東大震災・体験者インタビュー』東京大学社会情報研究所 廣井研究室。

10) 名和喜代さん(当時16歳)の手記。『関東大震災・体験者インタビュー』東京大学社会情報研究所 廣井研究室。

11) 「3万8千の焼死体／関東大震災(6)」ことばマガジン：朝日新聞デジタル。

参考文献

生田誠『2005 日本絵葉書カタログ』里文出版、2004年10月。

乾由紀子『イギリス炭鉱写真絵はがき』京都大学学術出版会、2008年1月。

橋爪紳也『絵はがき100年 近代日本のビジュアル・メディア』朝日選書791、朝日新聞社、2006年1月。

細馬宏通(1)『浅草十二階一塔の眺めと〈近代〉のまなざし』青土社、2001年6月。

細馬宏通(2)『絵はがきの時代』青土社、2006年6月。

『関東大震災・体験者インタビュー』東京大学社会情報研究所 廣井研究室

http://www.hiroi.iii.u-tokyo.ac.jp/index-genzai_no_sigoto-tokyo_chokka_jisin-kantojisin_taiken2.html (2017年10月22日筆者による確認)

「3万8千の焼死体／関東大震災(6)」ことばマガジン：朝日新聞デジタル、2013年3月19日。

http://www.asahi.com/special/kotoba/archive2015/photo/photo.html%3Fphoto=%252FS2007%252Fupload%252F2013031100001_1.jpg.html (2017年10月22日筆者による確認)

(いぬい ゆきこ 本センター非常勤講師)